

博士論文審査及び最終試験の結果

N. A. ベルジャーエフは20世紀ロシア思想を代表するもっとも重要な思想家の一人であり、また一般にロシア思想史・精神史の本質を理解するうえで欠くことのできない人物なのであるが、残念なことに、これまで日本では原典と原語にもとづく批判的研究は、若干の試みをのぞいては皆無といってよいほどなされてこなかった。その原因の一つは、彼の思想が旧ソ連の公式的イデオロギーに反するものであったこと、また、彼が出国を余儀なくされ、亡命先のパリでその後の思想活動を行わざるを得なかったことにある。しかしながら、ソ連政権末期にいたって、イデオロギー的なしめつけはしだいに解除され、ベルジャーエフの著書も旧ソ連国内で出版されるようになり、旧著作へのアクセスも可能になった。ソ連崩壊後は、ベルジャーエフ研究への障害はいっさい取り除かれるようになったばかりか、ロシア国内でベルジャーエフに対する関心が高まり、旧著の再版も続々となされるようになって、ベルジャーエフ・ルネッサンスとでもいうべき状況を迎えている。本論文はそうした状況において執筆されたもので、ロシア語の原典・文献にもとづく研究という意味でも、ベルジャーエフ思想の本格的研究の展開のためのパイオニア的試みといってよい。

本論文は2部各2章、計4章から成っている。第一部第一章は、時期的にはデビュー期（「F. A. ランゲと批判哲学」、1899-1900年）から1903年頃までの期間を扱い、マルクス主義への関心からイデアリズムへの移行が検討されている。ベルジャーエフの思想活動は一般に、マルクス主義への関心からイデアリズムへ、そして宗教哲学へと変遷をとげたとされているが、本論文の執筆者は、ドイツの研究者R. レスラーのベルジャーエフ研究から大きな示唆をえながら、独自に現段階でのベルジャーエフ研究文献を渉猟し、また、これまで入手・アクセスすることが困難であった初期ベルジャーエフの雑誌掲載論文等に直接あたってみることにより、初期ベルジャーエフ思想の展開を詳細に跡付けている。

ベルジャーエフは若年時より、また長じてはG. I. チェルパーノフの影響のもとにカント批判哲学に親しんでいたが、当時の社会状況からマルクス主義にも関心をもつようになり、両思想の結合を構想しようとした。それはイデアリズムを世界観とし、その大枠の中にマルクス主義を社会学的理念として位置づけようとするものであった。そして1901年の論文「イデアリズムのための戦い」で自己の思想的立場をこのイデアリズムとして確立するのである。この段階では、まだカント批判哲学の影響が濃厚で論理主義を世界観の客観的側面、マルクス主義の階級的観点は世界観の主観的側面として両者の調和が求められたのであった。ここには生とつながりをもつ一貫した世界観を構築しようというねらいがあったが、ベルジャーエフのイデアリズムの基調には批判哲学の論理主義と同時に、その倫理学、人間学への志向が強く根付いていたことが認められる。

しかしながら、ベルジャーエフにおけるイデアリズムの深化は、カント哲学のもつ諸問題に対する批判をとおして実現される。彼は、とりわけ、カントの現象と物自体という二分法を批判し、物自体を排除し、現象界のみをリアルなものとする一元論的認識論を構築しようとする。そして、主客の分離という思想を退け、認識を認識する者と認識

される対象との相関として把握しようとしたのである。その結果、精神的存在と物質的存在の間に厳然たる相違を認めず、認識主体による認識作用の構造化のみに専心する立場を批判し、存在の問題を積極的に取り込むことになる。ベルジャーエフのイデアリズムは「経験的レベル」と「超経験的レベル」（あるいは「超越的レベル」）の二分法の立場に立ち、超越的な構造の中で絶対的な真理・価値、全人類的な理念・理想を追求する営為を形而上学とするのである。ただし、ベルジャーエフはこの超越的レベルにのみとどまるのではなく、二つのレベルが相関することによって、人間を生において主体として取りもどすことが可能になる。

ベルジャーエフのイデアリズムの底流にある倫理学・人間学志向はカント哲学のそれを批判的に取り入れたものだが、この志向はその後のベルジャーエフ思想の展開の重要な原動力になる。ベルジャーエフはカント倫理学・人間学が原理の形式化を志向することを批判し、生身の人間の理想的完成、人類の理想的完成という志向をはっきり打ち出すのである。前者については人格的個人（リーチノスチ）、自由、現実・実在性（レアーリノスチ）といった基調概念、後者については人間の進歩・発展、歴史における必然性と自由といった基調概念が導きだされる。さらに、後の宗教哲学への展開にとって必要不可欠な「神」、「神性」の概念がここに登場する。すなわち、カントは道徳的要請として神の現存や不死などを認めようとしたが、ベルジャーエフはこれを「神性とは最終的な完成」「道徳法則は絶対的なものの直接的啓示であり、それは人間内部での神の声である」といった形で受容するのである。のちに神性は人格的な神へ（そしてまた、神の根底に神性の概念がふたたび登場する）と発展し、人間の理想、絶対的人間としてのキリスト論が展開されることになる。

初期ベルジャーエフの思想的歩みは、ほぼ以上のようにまとめられるが、執筆者の把握は大筋において適確であり、「マルクス主義からイデアリズムへの移行」にともなうベルジャーエフの思索がよく跡付けられている、といえる。

第二章は、1903～1907年頃の時期の思想的展開を扱ったものであるが、ここではベルジャーエフにおけるイデアリズムの深化、宗教哲学への移行が検討される。

カントの倫理学に導かれて「宗教的なもの」に到達したベルジャーエフは、宗教・信仰が人間と世界の関係全体におよぶ、日常的かつ超越的な精神的営みであり、人間の自由な理想的本性のあらわれ、と確信する。そして、こうした立場から、歪曲された（主にロシア社会における）宗教現象（例えば、マルクス主義、ロシア正教など）を検討することによって人間の信の構造を問い直そうとしたのである。それは自由な精神と批判的態度にもとづく宗教観であり、「人間に共通な宗教」への移行を志向するものであった。こうした宗教観がなによりも人間精神の根源から生みだされるものとするベルジャーエフは形而上学的人間像の探求にむかうのである。

人間は精神的存在であり、個人のうちに内包される精神とは「神性の似姿」とであるという。この精神の本質を実現する力が自由であり、ベルジャーエフは「自由は神であり、存在するものとしての絶対的自由である」ともいう。自由による精神の具体的な現実化が個人であり、精神の根本的な質の開示・展開が進歩・発展であるという。このように個人、「私」はデカルトの「コギト」、あるいはカントの「意識一般」、「超越的主体」とは異なり、超越的なものと個別的なものを総合した存在であり、ベルジャーエフはこれをモナドと見なし、自分の思想を「唯心論（＝精神原理主義）的モナド論」、「一元・

多元論」と規定した。こうして、「精神的實在（レアーリノスチ）」と「精神原理主義」の方向にむかって彼の思想は掘りさげられて行くのである。「精神原理主義」の立場に立つとき、認識論はどのように構造化されるか。ホミャコフはドイツ観念論哲学が存在をなおざりにしたと批判したが、ベルジャーエフはこれを受けとめ、「実質を、存在するものを求め」ようとするのである。精神一元論によれば、あらゆる存在は意識、精神的存在となり、特に人間、個別的存在者はその範型とされる。認識するものと認識されるものは分断されず、絶対的に同一なものとして関係性のうちに直観される。こうしてベルジャーエフは「認識論的神秘主義」を宣言するのである。

ホミャコフの思想の再発見の後、ベルジャーエフはこの思想を受け継ぐロシア思想、20世紀初頭の「ロシア・ルネッサンス」、なかでもメレシコフスキー等の「新しい宗教意識」に注目することになる。たとえば、後者における「肉（体）の聖別」の問題がそのひとつで、それによると、キリストは籍身することによって人間の肉体をそなえることになったが、ここにおいて神的原理と人間的原理の結合が生じ二性論が成立する。さらに、このキリストが十字架にかけられ肉体に刻印された罪があがなわれることによって肉も聖化され変容するのである。この新しいキリスト論は心身二元論を排すると同時に、人間もまた二つの世界に関与する存在であること、人間の神人過程を承認することになる。肉（体）についての議論は性の問題にも関係づけられ、「愛の形而上学」が展開されるのである。「宗教がすべて、すべての中に宗教がある」として宗教哲学への移行を果たしたベルジャーエフは神秘的實在（性）（レアーリノスチ）の構造化としての宗教哲学に本格的に取り組むことになるが、その中心となるのが己が「神」観の確立の作業である。神は倫理学の要請によって仮構される神ではなく、生きた人格をもった神でなくてはならない（神性から神へ）。神の生きた人格性は神との交流がリアルに生き生きと感得されることによる。そうした神は「言」によって、ロゴスによって語りかけ（内なる神の声）、啓示を与える。神は超越するばかりでなく、内在的なものともなる。宗教の中の哲学によって神秘的認識論、真のグノーシスが成立する。神秘主義はデカダン芸術も志向するところであったが、デカダン芸術は「肉を言葉に、存在を文学に変じる」のに対し、神秘的リアリズムは言葉を肉に変じることにより新しい存在を創出するのである。ベルジャーエフは新たな存在、新しい人類の創出を目的としたテウルギヤ的芸術を提起する。創造のねらいは究極的には永遠で不死の完全な生を得ようとすることにあり、そうした宗教は神人の道にのみ可能であるという。

第2部は1908年以降のベルジャーエフの哲学的展開を『自由の哲学』、『創造の意味』における具体的論文に即して論じたものという。そのうち、第3章は1911年刊の『自由の哲学』における認識の問題を中心に扱っている。もともと『自由の哲学』は1908年以降発表された5編の論文に第一、第七章の論稿を加えて一冊にしたものであり、しかも、これらの論文はすでにそれまでにベルジャーエフが提起した諸問題を掘りさげ「存在論的認識論」の構築にむけて展開したものであるため、『自由の哲学』の、いわば内容要約である第三章には、前章の論述との重複的部分が認められる。ベルジャーエフは批判哲学の認識論における主客の分離を批判し、認識は主客未分のレベルにおける認識するものと認識されるもの（存在と存在）の同一性において成立すると主張した。同一性の基盤は共通のロゴス、大いなる理性であって、人間は宇宙と（精神的に）同質であるがゆえに宇宙を認識するという。この関係は愛とも結婚ともいわれる。シェ

リングの「合理主義的同一性」に対して、ベルジャーエフは「神秘的同一性」を主張するのである。認識において存在と存在はともに精神的実質として人格的交わりのうちであり、この思想はソボルノスチ（精神的共同性）にもとづく「教会的認識論」といわれる。

ベルジャーエフの提起する新しい贖罪観によれば、主客分離の思想は原罪の問題と深く結びついている。神への非愛、悪しき選択としての原罪の結果、人間は必然性、時間性、空間性の支配する有限の世界のうちに置かれることになった。主客分離の批判主義哲学はこの必然性、時間性、空間性にとらわれ、それに奉仕する哲学である。それゆえに我々は、選びかえすなわち、有限の世界への愛を脱し新しい愛の対象を選択することによって、新しい生、世界に生まれかわることができる。存在論的認識論は必然的に創造論となる。

第四章「『創造の意味』における人間論」は『創造の意味』（1914年。原著には、一人間正当化の試み一、という副題がつく）を取りあげたものだが、これも第三章同様、原著の解説的要約であり、検証・比較・敷衍の資料もほとんど原著のなかにある。ベルジャーエフ自身の評価によれば、原著はもっとも完全なものとは言いがたいが、もっともインスピレーションに満ち、はじめて独創的な哲学思想が表現されたもの、という。

ベルジャーエフの創造論は、伝統的キリスト教の「罪」の観念にたいする反発に起源している。「罪」については本論文内で数度取り上げられているが、ここでも、本来的な罪とは、むしろ、精神の非自由、悪魔的必然性への隷属であるという。これから脱却する自由が人間には与えられており、脱却は世界の創りかえ、新しい世界・存在・生の創造となる。これは神の要求するところでもある。人間は必然性に属すると同時に「神の似姿」でもある。したがって人間は神性にあずかる可能性をもっており、神の創造は人間によって継続されうる。認識もまた創造行為であり、真理とは創造ということになる。こうした哲学的認識のための絶対的なアプリアリは「人間による自らの意義の特別な自覚」である。以上の創造論は、さらにキリスト論、三位一体論によってより完全なものに仕上げられる。

ベームによれば、アダムはロゴスがソフィアを内包する両性具有者であったが、陥罪により両性具有の本性を喪失し、「神の似姿」の全一性を失ったのであった。キリストは処女懐胎により、その両性具有性を回復し、「神の似姿」として全一性をとりもどす。両性具有の喪失はこの世界への頹落であり、主体・客体の区別の出現を意味する。キリストは籍身により、神と人とのつながりを回復する仲介者であり、十字架にかけられることによって人間の罪をあがなった結果、人間は神的本質への関与の可能性を回復するのである。神の創造はキリスト・ロゴスの籍身のうちに継続され、人間はキリスト再臨までキリストの事業を継続することになる。この創造は神の創造を補いゆたかにするものという。キリスト論を基盤に置くこの創造論はさらに三位一体論によってより完全なものとなる。

ベルジャーエフはマイスター・エックハルトにしたがい、神より深い神性を設定した。「三一性とは（この）神性の中での内的運動であり、三一性の動態の中で世界が創造される」という。創造のモチベーションは、神が孤独を脱すること、神的な愛の呼びかけ、とされる。聖三位一体の第二位格は神の子、絶対的人間たるキリストであるが、キリストの籍身により、人間は三位一体の本質に関与することができるようになる。位格

はペルソナであり、個別的なものである。したがって、「神の似姿」たる人間は個別的な存在者、個、人格的個人でなければならず、創造は真に個別的な存在者によってのみ可能であるという。ベルジャーエフはさらにその創造論を三位一体によって根拠づけるために、ヨアキム・フロレンシスの、啓示にもとづく三時代説を歴史の発展過程のモデルとして起用する。その三時代とは、「父の時代」「子の時代」「聖霊（聖神）の時代」のことで、旧約的律法、新約的贖罪の時代に続く「聖霊の時代」は「創造的な人間の本性の神的性格が最終的に開示され、神的な力が人間的な力となる」時代、人間が自ら啓示をなし、神の呼びかけに答えていく時代であり、この新しい時代においては神の創造がキリスト再臨まで人間によって継続されるという。

創造行為の本質はなによりも芸術的創造によって明らかにされる。ここからイタリア・ルネッサンス論が展開される。ベルジャーエフの評価は、「ルネッサンスの神秘はそれが成功しなかったことにある」という一言で表されよう。ルネッサンス初期においては、「罪深さ」のみにとらわれた旧教の枠を越えようと新しいキリスト教への期待が高まるが果たされず、中期にはいって古典古代の異教的人間性が高揚する人間性希求に接続される。このことは芸術においてはキリスト教的なものはロマン主義の超越的憂愁として、異教的なものは古典主義的完成として両者の混合の形で現れるが、キリスト教における人間論的真理が明らかにされていなかったために自然的人間が解放されてしまうことになる。ここに近代精神としてのヒューマニズムの起源があるが、このようにして解放された人間は自然的（必然性の）世界のなかで自由な自立した人間となり、次第に神から離れ人間と人間的なものを神化するようになる。実証主義もまた自然的世界へのとらわれにほかならない。こうして、ヒューマニズムは反ヒューマニズムとなるが、ベルジャーエフはこれも人類にとって必要な経験であるとした。20世紀精神の危機は現世的完成を志向する古典主義と超越的憧れという対立の変奏であり、その乗り越えのためにベルジャーエフは存在と創造のジンテーゼとしてのテウルギヤ、新しい存在を實在として形成するテウルギヤを提唱する。創造論は現代文明批判ともなる。

本論文にたいして指摘された問題点は以下のとおりである。

1) 「形成」という問題設定とその方法論が安易ではなかったか。本論文はもっぱら原著を年代順に検討することによって思想の形成を追っているが、ベルジャーエフの思想の到達点、確立された思想の本質から遡行する形で「形成」を検討する、という視点があってもよかったのではないか。しかも、第三、四章は、それぞれ原著『自由の哲学』、『創造の意味』の大意概要ないし祖述であり、補章と合わせると、一編の論文というより、論文集の印象を与える。

2) 直接的引用の部分は別として、地の文における思想の発言主体がベルジャーエフなのか本論文執筆者なのか不明なところが多い。ベルジャーエフに共感する執筆者がベルジャーエフの思想の同語反復的敷衍を行っているのだろうが、このことがまたベルジャーエフの原文以上に本論文の文章・文体を複雑にわかりにくいものになっている。

3) 思想の本質にかかわる問題としては、ベルジャーエフはペルソナリズムの哲学者とされているが、このペルソナリズムについては二、三の言及はあっても、その立場は不統一で、主題的な検討はほとんどなされていない。また、「ランゲ論文」の評価に対しても批判があった。

4) 術語の概念規定がよく検討されずに用いられている場合が多い。例えば、「超越」の諸義、「超越的」と「超越論的」の諸義・使いわけ、「実存」の意味内容、「実存主義」の諸相、「唯物弁証法」や「俗流唯物論」等の状況的意味などが吟味・検討されずに使用されたり、明示化されないことが多い。論文冒頭の「ロシアには哲学が果たして存在するのか」の哲学とはなにを意味するのか、それと思想史との関係はどのようなものか、ということも不明である。

5) レアーリノスチ、テウルギヤなどの原語借用、リーチノスチの「個」、「類的根源力」、「人間一般」といった翻訳語も問題になった。

6) 同時代の思想、あるいは関連思想についての検討が不十分である。例えば、ロシア哲学・思想史への目配り（特に直接原典にあたったものが少ない）が不十分であるし、V. ソロヴィヨフの思想的影響がまったく検討されていないのは理解に苦しむ。同様に、ヨーロッパ思想についても、その（史的）展開・同時代的状況についての検討は十分とはいえない。ネオプラトニズム、ペーメ、エックハルト等の神秘主義の本質と展開も直接的ソースで吟味・検討したうえで言及・援用されるべきであった。ロシア思想と西欧思想との出会いにおいて思想したベルジャーエフを扱う場合、以上の作業は不可欠である。

7) 本論文中の誤植はおびただしい数にのぼり、注・文献表記もずさんで、あたかも提出準備稿のような印象を与える。原典と直接照合・参照したと称するドイツ語の表記もきわめて不正確である。

以上の諸点、それにたいする論文提出者の応答を考慮したうえで判定された評価は以下のとおりである。

1) 本論文は現段階でのベルジャーエフ研究を渉猟し、また、ベルジャーエフの著作のロシア語原典を使用することによって執筆されたもので、ベルジャーエフ思想の形成過程、その初期思想の本質を全体的によく捉えている。この期の思想はその後のベルジャーエフの思想をほとんど胚胎しており、ベルジャーエフ思想の全体的把握にとって基盤となるものであって、その意味で本論文は今後のベルジャーエフ研究にとっても意義あるものと認められる。

2) 特に第一部は、シュルツェ、レスラー等に負うところが多いとはいえ、これまで一般にアクセスできなかった初期の諸論文を直接検討し、思想形成の軌跡を着実に跡付けている。

3) ベルジャーエフにおける宗教哲学の形成をたどることによって、ホミャコフ以来のロシア思想史の本質と特色、現代におけるその可能性をそれなりに明らかにし、ロシア的精神性と西欧近代の精神性との相違にも新しい光をあてているように思われる。

4) ソ連崩壊後、ロシア思想は再生にむかって歩み出したが、今後のロシア思想の展開においてベルジャーエフの果たす役割は大きいものと思われる。その意味で本論文はロシア思想の今後を占うためのひとつの資料となりうるものである。

以上を総合的に評価した結果、本審査委員会は全員一致して、以下の条件のもとで本論文が博士学位を授与するにふさわしいものと判定した。すなわち、公表にあたっては上記の諸点をよく考慮し、しかるべき修正・改善を行う。